

土木防空資料

1-1-3

空襲方法

(昭. 17. 10.)

1. 空襲の一般原則⁽¹⁾

空襲の価値は集團攻撃にあり、且最大の効果は奇襲に依つて擧げられる。故に爆撃は常に敵が多数目標中の何れを攻撃せられるか全然豫知しないものに對して行ひ、敵の防禦機關を各地に分散せしめ徒勞に終らしめるのを可とする。従つて攻撃は規則的な間隔、同等兵力及び同一前提下に於て計畫せらるべきものではない。

攻撃目標の數及び種類は、爆撃機の兵力及び目標の有する意義に依り決定するものである。

爆撃の實際的価値は、其の惹起せる物質的損害に依つて決定せられる。故に攻撃兵力は所期の目的を完遂し得る如くに強力とし、攻撃開始せば徹底的に最後迄敢行すべきものである。但し使用兵力に比し成果揚らず且損害大なる時は、中止するのが原則である。

爆撃機は如何なる事があつても與へられた任務を貫徹せねばならぬもの故、決して敵機に對し使用すべきではなく、従つて出來得る限り空中戦を避けねばならぬ。若し爆撃機が劣勢な敵驅逐機と空中戦を行つても勝利を得難いときは、補助目標或は敵地の他地點を爆撃し、部隊は再び航空據點に復歸する如く努むべきである。部隊の解散は敵の攻撃を容易ならしむる故、如何なる場合にも避けねばならぬ。

2. 爆撃編隊の任務

爆撃編隊の任務は、次の3に大別される。

- i. 破壊任務 これに使用される戦闘資材には、破甲爆彈、表面效力用地雷爆彈、輕爆彈、燒夷彈、照明彈等があり、攻撃目標により適宜使用せられる。
- ii. 妨害任務 目的とする所は敵の連絡線中斷にあり、之が爲め街路、橋梁、鐵道等に對しては、小型爆彈の多數投下を行ひ一定地區の連絡を一時的に阻止する爲には長延期信管附爆彈を使用し時間を變へて爆發せしめる。
- iii. 敵の精神的抵抗力を減退せしむること 主として都市、兵營等を破裂並に瓦斯彈にて攻撃し、不安、恐慌を惹起せしめる。

3. 空襲目標

- i. 著名なる目標 周知の一般的目標であつて、飛行場、一般軍事施設、軍需工場、交通連絡網、工業地帯、港湾、水門、堤防等である。
- ii. 攻撃目標 戦闘に直接關係ある軍事施設、陣地、據點及び戦備に重大影響ある軍需工場、工作物等が之に屬する。これには直ちに制壓を要するものと、時期の経過中に攻撃すべきものがあり、目標及び最適攻撃點の選定如何により爆撃の成果が左右される。
- iii. 一時目標 作戰飛行中に初めて確認される。

4. 晝間爆撃と夜間爆撃

爆撃は晝夜を問はず席捲的且連續的に實施さるべきもので、この爲晝間用及び夜間用の特殊機が製作されてゐる。

A. 晝間爆撃

晝間爆撃機は速力大きく且操縦性優秀であるが、搭載量は小さい。大高度を取り且防禦火器に依つて、各機相互に支援し得る如き、密集隊形を編成する。飛行時の高度は絶えず變換し且波狀飛行を行つて、對空砲火による損害を可及的少くする。

(1) 獨逸國民防空「フォンビューロー述」より抄録以下 1.2.3 頁同上

1. 利點及び缺點

利點としては

- (1) 飛行安全にして方位決定が簡單なること。
- (2) 偵察の結果が良好なること。
- (3) 攻撃編隊の兵力が思ふ儘に使用し得ること。

缺點としては

- (1) 絶えず地上より發見され、速かに防禦體形を整へられること、即ち奇襲の要素を缺くこと。
- (2) 地上防空威力が夜間より大にして、且敵驅逐機の攻撃を受けること。

2. 飛行隊形

飛行隊形の最小單位は小隊で三機よりなり、指揮官機が必ず先頭を飛行する。爆撃の基本隊形は中隊であつて、三箇小隊で編成される。(圖-1)

3. 爆撃方法

- (1) 高空爆撃 4000~6000 m の高度を以て行はれるもので、目標は大都市、工業施設、軍需工業、兵營等の大目標及び政治中樞地帯、港灣、船舶施設、燃料廠等の重要目標で、前者に對しては、恐慌、混亂を惹起せしめ、後者に對しては集中爆撃により直接破壊を爲すを目的とする。
- (2) 低空爆撃 20~300 m の低空を飛び、奇襲的に目標に接近し、且對空砲火による損害を出来るだけ小にせんとするものである。
- (3) 急降下爆撃、戦艦、航空母艦等の單獨目標及び橋梁其他の地上固定目標に對し、適確な照準をなす爲に目標上にて急降下し攻撃するものである。

敵の防禦薄弱なることが豫期せられるときは、集中爆撃を行ふ。

眞の攻撃に先立ち、快速部隊により陽攻を行ひ、敵機の攻撃を過早に誘引し、その航続時間の切れるのを待つて眞の攻撃をなすとか、或は爆撃機に隨伴する煙幕中隊により進路兩側に煙幕を展張して對空防禦を困難ならしめる等の方法が考へられてゐる。

B. 夜間爆撃

夜間爆撃機は晝間機に比し速力は小さいが、搭載量は大である。爆撃にあつては各機は一定の距離を取り單獨飛行をなし、阻害氣球等にて妨げられざる時は低空を飛ぶ事もある。離陸は夕方の殘光を利用するのが常であるが、曉に歸還せんとするときは夜間にも行ふ。爆撃航路上で敵機の攻撃を受けた場合は、機上火器により防禦するか、急に方向變換し又は急降下して戦闘より離脱する。

1. 利點及び缺點

利點としては

- (1) 攻撃手段、兵力を敵に確認せられず、奇襲の要素が大なること。
- (2) 防禦砲火の威力が晝間より小さく、敵驅逐機攻撃を受ける事が少いこと。
- (3) 單獨飛行により正確に照準する事が可能であり、反覆攻撃が可能なること。
- (4) 精神的脅威が晝間より遙かに大なること。

缺點としては

- (1) 方位決定並に航法が著るしく困難となること。

註 3. 爆撃方法に對する委員會談

爆撃高度は爆撃機の性能、對空火力の大小、天候等に依り決定せられる。高空爆撃は現在既に 8000 m 以上の高度より實施されつゝあり、爆撃機の性能増大及び對空火器の有効射程延長に伴ひ成層圏(高度約 10000 m 以上)よりの爆撃さへ行はれんとしてゐる。密雲又は斷雲あつて接敵容易なる場合、對空防禦の薄弱或は皆無の場合等には適宜の高度より爆撃が行はれる。

- (2) 集中爆撃が不可能に近いこと。
- (3) 目標捕捉が困難で且成果の確認が困難なこと。

2. 爆撃方法

攻撃方法は種々考へられてゐる。例へば

- (1) 豫め滑空飛行をなし過早に目標を照準し奇襲的に接敵する。

圖-1.

中隊三角隊形ヨリ成ル大隊縦隊



中隊扇形隊形



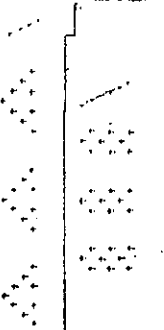
中隊縦隊



小隊群楔形隊形



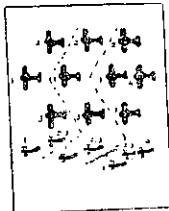
大隊横隊



中隊三角隊形



密集楔形隊形中隊



小隊群縦隊



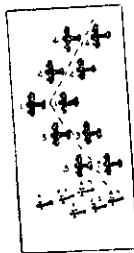
楔形隊形ヨリ成ル
大隊縦隊



大隊楔形隊形



中隊矢筈隊形



中隊楔形隊形



- (2) 眞の攻撃に先立ち、地上防空施設に低空攻撃を加へ、之により後続機に對する抵抗を排除し且聽音等困を難ならしめる。
- (3) 先行爆撃隊により延期信管付爆弾を投下し、之の炸裂する時期を狙つて眞の攻撃をする。
- (4) 爆撃目標を確認し、後続爆撃機の方向決定等に資するため、照明彈を投下する。

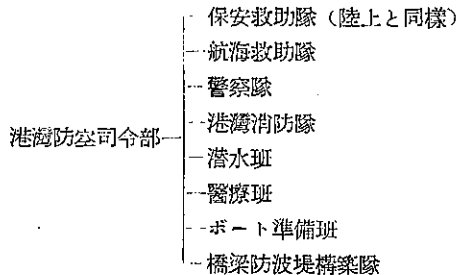
3-3-4 港 灣 (昭. 17. 10.)

1. 概 説⁽¹⁾

港灣は海岸、入江、河川沿岸に存し、鐵道及道路の交通連絡點にして、敵機にとり發見は容易である。
港灣は民衆の集中する關係より防空は割合に困難である。然し計畫的對策あれば、空襲の被害を減少し得る。

2. 組 織

港灣の防空組織は一般に陸地に於けると同様であるが、港灣業務より生ずる特別事項の處置の爲補助部隊を準備する必要がある。



此等の中航海救助隊は危機に瀕せる船舶を收容することが目的で、在來の保安救助隊のみでは解決は出來ぬ、特別な訓練を受けた専門家、航海者、技術者の任ずるもので、その主なる任務は次の通りである。

- (1) 爆撃により舵機を毀損せるか、指揮者なき船舶の運行
- (2) 漂流船舶の收容
- (3) 船員及旅客の救助
- (4) 船舶の漏水孔閉塞
- (5) 消防隊との密接なる協同

3. 防空の實施

(1) 港内在住者の防空實施

港内には在住者、船舶乗組員及旅客の防毒並に對彈防護室を設ける。而して防空下令時には如何なる事情の下にも一地點に住民の集中しない様統制手段を講ずる。空襲警報あれば、直に港内の交通は中止するのが原則であるが、船舶を無理に危険な港内に拘束しない。

然し荷役は最後迄實施しなければならぬ。

(2) 陸上の港灣施設の防空實施

港灣陸上兩防空組織間に格別の差異はないが、消防隊は港内特に石油港に於て新任務がある。防空下令時には石油港口、タンク等の前面の水面は浮游材木により遮斷し、可燃性内容物の水面に擴散するのを防ぎ、乗組員は陸地の防護室或は特設掩壕内に避難させる。

(3) 船舶の防空實施

船舶は其の大きさ、構造に應じ乗員を防護し得るもので、臨時に陸地に構築せられる防護室に略々匹敵する。

防空準備及び實施の責任者は船長で、船長の船舶上に實施すべき處置は人命防護の外、船舶自身の防護にも及ぶものである。船長は防空下令時の處置として特別防空任務を定め、その任務により乗組員中より對空監視哨を設け司令部と連絡をとらしめる。

防空任務は命令一下自働的に遂行されるものである。即ち水管の消火栓への接続、繩梯子及び梯子の吊下、見張座への着席等豫め訓練せられたる處置を實施すべきである。

⁽¹⁾ 獨逸國民防空「リヒター述」より抄録以下4.5頁同上

人員用警報手段として信號の使用は船舶用救急信號と混淆するものは使用することは出来ぬ。空襲警報の際、船員は港内にあると、航行中なるとを問はず船内に位置し、絶対必要人員のみ甲板に出で、他の船員は皆船内の防護室に位置せしめる。

乗組員は特別部隊に編成せられ、消火、修理、漏水孔閉塞、衛生勤務及び消毒用の所要器具を準備し、夫々特別號令を定めて置く。

船舶の防護室は水面附近にて船舶の中央に設け、防護室上方に1乃至2甲板がある方がよい。艙口は密閉すること容易なるため瓦斯防毒室とするのは簡単であるが、隣室との連絡は困難である。

河川及び港内用船舶乗組員は空襲警報の際直に上陸するか、又は大型船舶に赴き防護を求める。

4. 交通の處理

港内にある船舶は積卸の許す範圍に離散せしめる。空襲危機迫れば、港内の蟄集を避け、引火し易い物品を積んだ船舶は孤立せしめる。

爆彈を受けた船舶が航路を閉塞するのを避けるため、運行不能の船舶は航路の縁端に位置せしめ、航行中の船舶は原則として運行を中止し、出来る限り陸地直下に投錨するものとする。其際他船の追扱は禁じなければならぬ。

空襲時には航行中の船舶は安全港を求むることなく、寧ろ之より離隔すべきである。港内航行中の船舶は最適或は豫定の繫留地に投錨するか、繫留杭に繫留する。然し常に港口及び航路を閉塞しない様注意を要する。大鎌梁、瓦斯電氣工場及び重要物附近には繫留してはならぬ。

積卸中の船舶は空襲時に幾何の船員を下船せしめるかは其の時により決定する。初回の空襲では乗組員の大部を防護室に容れても良いが、連続攻撃の時は重要物の傍に在つて、作業を続けしめる。

5. 警報

如何なる場合にも警報信號は港内船舶より發してはならぬ。若し常にこの信號が發せられて居れば、爆彈命中せる船舶で危急信號を發するも、警報信號と誤認せられ、救助を受け得ないか、或は救助が遅延する。

6. 偽裝

港灣の如き大目標は繰返し空襲せられることは必然であるから、煙幕による遮蔽は殆ど効果がないが重要工場に對しては地上發煙器により、或は飛行機より發煙劑噴射により部分的煙幕遮蔽を実施すれば、多少の効果はある。然し危機に頻せる施設のみに對し煙幕を張つてはならぬ。敵の進入路然も港域外の地方に煙幕を張り、敵を欺騙する様努むべきである。重要な工場施設は防空塗料及構造物により被覆し敵よりの發見を困難ならしめることが出来る。